

初診時に指しゃぶりまたはおしゃぶり使用により開咬が認められた症例について

○品川光春、品川兼一

(しながわ小児歯科医院・佐世保市)

【目的】

長時間、長期間の指しゃぶりやおしゃぶり使用は咬合異常の原因となり、口腔機能の発達に支障を生じることもある。今回、当院におけるその実態について調査したので、その結果について報告する。

【対象と方法】

2006年1月から2008年12月までの3年間に当院に初診で来院した1,298名の中で、初診時に指しゃぶりやおしゃぶりを使用していたのは168名であった。そのうち、開咬症例37名中、初診時年齢が4歳未満で、初診以降2回以上受診して改善指導後の変化が観察できた、指しゃぶりの7名とおしゃぶり使用の4名の計11名について、診療録および口腔内写真で検討した。

【結果】

初診時年齢は2歳から3歳9か月で、平均年齢は2歳7か月、初診後の来院回数は2回から13回で平均5.5回であった。観察期間は最短1年2か月から最長6年2か月で、平均3年10か月であった。

初診時から乳歯列期での指導後の変化は、改善5例、やや改善4例、変化なし2例、悪化は認められなかった。最終観察時は初診時と比較して、改善7例、やや改善3例、変化なし1例、悪化は認められなかった。

【考察】

今回、習癖による開咬症例に対して、装置等を使用せず習癖の指導により改善することが認められた。今回観察できた11症例中7例は最終観察時には永久歯への交換が開始されており、乳歯列期で一度改善していた症例でも、その後永久歯への交換時期に指しゃぶりの再発や、舌癖による開咬が生じてきた症例も見られた。今後は指導の内容、時期、期間、改善のみられない症例に対する処置についてのさらなる検討が必要である。

乳幼児期の授乳栄養と保護者の口腔衛生に関する意識についての実態調査

○西めぐみ、井上志保^{*}、尾崎みずほ^{**}

(みのはら歯科医院(唐津市), ^{*}井上歯科医院(唐津市), ^{**}小倉医療センター(北九州市))

【目的】

近年の授乳栄養指導の流れは母乳栄養と無理のない自然な卒乳の推進である。そこで授乳栄養の現状を把握し、子どもの口腔衛生に対する保護者の意識の実態を調べて乳幼児期の口腔保健指導のありかたを探ることを目的として調査を行い検討したので報告する。

【対象と方法】

平成24年12月から平成25年3月に当院を受診した小児及び中学生の保護者にアンケート調査を行い297名を解析対象とした。小学3年生以下の低年齢グループと小学4年生以上の高年齢グループに分類しさらに母乳栄養群と人工栄養群の2群に分類した。アンケート内容は乳幼児期の授乳方法と口腔衛生に関する質問、歯科初診時の年齢及び主訴とした。

【結果】

1. 高年齢グループと低年齢グループの比較
低年齢グループの母乳栄養の割合は高年齢グループよりも高かった。低年齢グループの母乳栄養群は他と比べ卒乳時期が遅かった。

2. 低年齢グループの解析

母乳栄養群では人工栄養群よりも1歳前に仕上げ磨きを開始した割合が高かった。両群共に間食の注意度は85%以上、フッ化物の有効性の認識度は20%以上が不十分だった。また母乳栄養群で歯科初診時の主訴が主に予防検診の場合初診時年齢が低い傾向があった。母乳栄養群の85.3%は行政からの口腔保健に関する情報量に十分に満足していなかった。

【考察】

近年母乳育児の割合が増え母乳栄養では卒乳時期の遅延傾向がみられたことから、齲蝕罹患防止のためより早期からの口腔衛生管理と指導が必要と考えられた。また保護者が口腔衛生に関心を払いつつ母乳栄養を長期継続する場合があることを理解し齲蝕予防の環境を保護者と共に作り保護者が安心して育児を行えるよう支援することが重要と思われた。